

第三章

三大陶工——パーレンセ、ベートゲル、

ウエッデウツド

忍耐は剛毅の最美最貴なる部分にして、又最も稀なるものなり。忍耐は總ての快樂と總ての勢力の根柢に在り、希望と雖も、非忍耐之に伴ふときは、「幸福」たることを羅む。

二十五年前までは、かくも美しく彩色して陶藥を塗りたる盃はあらずりき。余は粘土について何等の知る所なかりしに拘はらず、此頃より陶藥を探し始めたり。それは恰も何も分らぬ暗黒中に物を探る人の如くなりき。

ベルナード、パーレンセ

總ての傳記に於て吾人は、耐久堅忍の實例を見るものなるが、陶器製造の歴史に於ても亦其例の最も著しきもの多數を見るなり。其中最も人を動かすものとして、吾人の選びたるあり。何々ぞや。曰く佛蘭西人ベルナルド・パールセ、獨逸人ヨハン・フリードリッヒ・ベートゲル、英國人ジョシア・ウエッデ

古代の陶
器製造

ウツド三人の生涯是れなり。

エトラス
カン人の
陶器

粘土より普通の器を造る技術は、古代國民の多くは之を知りしが、効藥を
かけたる土器を造る技術は、寧ろ多く知られざりき。唯古のエトラスカン人
(羅馬建國の以前より伊太利半島にありし人種)のみ此術を知り居たり。彼等
の造りし土器の標本は、今も古器物の中にあり、されど、此術は久しく世に絶
えて、之を知るものなかりしが、比較的近代に及びて漸く回復するを得たり。
エトラスカン人の土器は、古代に於て甚だ價值あるものにして、一個の壺は
オーガスタス(羅馬の皇帝)の時代に於て、同量の黄金と等しき價ありき。ム
ア人(亞非利加北部海邊の黑人種)は此術を知り居りしが如し。一千百十五年
ビサ人がマジヨルカ島を占領せし時、同島に於てムア人は此術を行ひ居
りしと云ふ。戦利品の中にムア製の土器の皿多くあり。戦勝の記念として
彼等は之をビサの四五の寺院の壁に着けたりと云ふ。されば今もビサの寺
院に之を見ることを得るなり。後約二世紀、伊太利人効藥を塗れる土器の模
造を始めたり。彼等は此土器をマジヨリカと呼べり。是れムア人土器製造

フロレン
スの彫刻
家ラッパ
チア、即
ち効藥を
再發見者
の像

の場所マジヨルカ島に因みてなり。

伊太利に於ける陶器製造術の回復者若くは再發見者は、ラッパチア
と云ふフロレンスの彫刻家なり。ザッパチア、彼を評して曰く、『ラッパチアは實に、不
屈不撓の堅忍を有する人なり。終日鑿を離さず、夜は其大部分を描畫に用ひ
たり』と。彼繪畫を學ぶこと甚だ熱心勤勉にして、夜遅くまで勉むるときは、足
が寒氣の爲めに凍えんことを恐れて、匏屑の箱の中に足を入るゝを常とせ
り。是を以て彼は足を暖め、其勉強を續け得るやうなさんとせしなり。ザッパ
チアこれについて曰く、『而して余は少しも此事を驚くものにあらず。蓋し早く
苦熱苦寒飢渴等の苦痛に堪ふる力を得ずしては、誰人能く一技に達する
を得んや。彼の徒らに安逸を求め、世の歡樂を事としながら、尙且名譽の地位
に達し得べしと思惟するが如き徒輩は、自ら欺くものと謂ふべきなり。――
何となれば熱達して名聲の得らるゝは、睡眠に因りてにあらざる覺醒し觀察
し、且つ絶えず勞作することに由りてなり。』

ラッパチア甚だ専心勤勉なりしにも拘はらず、彫刻に依りて得る金にては充分

に其身を支ふる能はざりき。かくて一思想彼に起りぬ。曰く、大理石よりは軟く且價低き材料を以てせば此業を續け得べしと。かくの如くにして、彼は粘土を以て模型を造り、且其模型を久しきに耐へしめん爲め、粘土に藥を塗り、之を焼く試験を勉めたり。屢々試験を爲せし後、遂に一物を粘土に塗り、爐に投じて高熱の火に焼き、以て殆ど不滅の勦藥となす方法を發見せり。後彼更に勦藥に彩色を施す術を發明して、大に其美を増すを得たり。

ラカが陶器製造の名聲全歐洲に廣まるに至り、其造れる陶器は、標本として廣く普及しぬ。佛蘭西及び西班牙に送られたるもの甚だ多く、兩國にては人々いたく之を賞讃せり。當時土器と稱するものも、粗末なる鶯色の壺や、小土瓶が唯佛蘭西にても製造せらるゝ位に過ぎず。而して粗末の大型の製造は、パーレセの時に至るまで、只僅の改良を施せしのみにて續きたりき。パーレセは勇敢不撓を以て、絶大の困難と苦闘せし人。其常職は變化多き彼の生涯を通じて、殆ど小説的の光を放てり。

ベルナルド・パーレセは、一千五百年の頃、佛國の南部アーデンの寺領に

ベルナルド・パーレセの生誕地と云ふ小動配

生る。父は玻璃工なりしが如く、彼も此職に養成せられたり。兩親は、赤貧の人、其子に教育を施すこと能はざりき。後パーレセ言ひしことあり、『余は誰人にも見ゆる天と地との外に、一の書物をも有せざりき』と。されば彼は玻璃に繪を描く技術を學びたり。次に尙ほ圖畫を學び、後又讀み書きを學びたり。

十八歳の頃、玻璃の業衰頽せしかば、自ら背囊を負うて父の許を去り、何か地位を求めんものをとて世に出てたりき。最初彼ガスコニーに向つて旅立ちぬ。途中働き口のある處にては玻璃の業を營み、又屢々測量をなしつゝ、次に北方に旅立ちぬ。佛蘭西、フランドル、南獨逸の各處に滞在しつゝ、

かくてパーレセは、世に放浪すること十年以上にも及びしが、今や妻を娶りて其放浪生活を罷め、下シャレントのサントと云ふ小都會に留まりて、玻璃に繪を描くことゝ、土地測量とを業とせり。此處にて子供は生れ、責任のみならず又費用を増し、職業に勉むるも其得る所は費す所に及ばざりき。故に今や彼更に其身を活動せしむべき必要に迫れり。思ふに彼は玻璃描畫の如き不確實なる職業に倦み、勞働をなすよりも、他に勝れる仕事を有し得べし

伊太利製
のカップ
を燃やして
見ると

と感ぜしならん、されば彼は大器に描き、又之に渤薬を塗る技術に其注意を向くるに至りぬ。然るに、彼は此事に關しては少しも知る所なかりき。彼は未だ會て土器を焼く所を見しことあらざりき。されば誰人の助をも借る能はずして、萬事皆自ら學ばざるべからず。さりながら、彼は希望に充てり、學修の心中に燃えたり、無限の堅忍と不屈の耐忍とを有せり。

彼一日伊太利製の美しきカップを見たり。こは多分ラカ・デラ・ロピアの製作ならん。之を見て彼は陶器製造の術について思をめぐらすに至りたり。是れたゞ偶然に一カップを見たるのみ、寔に瑣細の一事に過ぎず。普通の人ならんには、之より何の得る所あらんや。又若し普通の場合ならんには、パーレセさへも、亦其儘看過せしならん。たゞ彼や時に恰も職業を更へんと思ひ居たる際なりしかば、之を見て忽ち之に倣はんとの慾望起りしなり。之を見て彼の全性は亂れぬ。此カップを塗れる渤薬を再び發明せんとの決心は、これより後、恰も煩惱の如く彼に附き纏ひぬ。獨身ならんには、此秘密を搜索せんため伊太利に赴きしならん。されど妻と子供等とは其の足手纏ひにして、之

渤薬の
秘密を
探るに
試み

を難るゝ能はず、されば彼は妻子の傍にありて陶器製造の方法を見出さんとして暗中の搜索をなしたりき。

無益なる
勞苦なる
試み
に數年
を費す

最初は單に渤薬を作れる材料を想像し得しまでなりき。依つて其想像の確實なるか否かを確かめんと欲する試みをなしたり。彼は渤薬を作れりと思ふ材料を皆打ち碎きぬ。次に普通の土製の壺を買ひて粉々に碎き、其上に打ち碎きし薬品をかけ、特に其爲めに造りし竈の火中に之を投じたり。彼の試験は失敗に歸しぬ。碎けし壺薪と薬品と時間と勞力との徒費は、實に其結果として残りし所なりき。斯の如き試験の唯一の明かなる結果は、衣服を買ひ、子供の食を求むる代を、無益に消費することなり。由來婦人はかゝる試験には賛成せざるものなり。パーレセの妻も、萬事に忠實なる婦人なりしとは云へ、再び壺を買ふ事には同意すること能はざりき。彼女にとりては、此土製の壺を買ふとも、其結果は之を打ち碎くのみに止まると思はれたり。さりながら、パーレセは渤薬の秘密を知らんと決定に心全く奪はれて、之を其儘に棄つること能はざりしかば、妻も是非なく之に同意せざるを得ざり

き、

月又月、年又年、パーレセは其試験を續けぬ。最初の竈は失敗なりしかば、戸外に新に造りたり。此竈にて前よりも多くの薪を焚き、前よりも多くの薬品と壺とを費し、前よりも多くの時間を失ひたり。而して遂に赤貧は、彼の家族を見舞ふに至りぬ。彼は曰ひぬ、かくして悲哀と歎息との中に今は多年を無益に費したり、全く目的に達する能はざりしが故なり」と。試験の間には、時々前の職業を勉めたり。——即ち玻璃に描き、肖像を畫き、土地の測量をなしたりき。されど是等の仕事に依りて得る所は甚だ僅少なりき。薪を費すこと甚だ多くして、之が費用に堪へず、遂に彼は其竈にて試験を續くること能はざるに至りたり。されど彼は尙ほ壺の破片を求めて、前と等しく之を幾百の片々に粉碎し盡くし、薬品を之にかけ、サントより四哩半を隔てたる一煉瓦製造場に之を持参して、普通の竈にて焼きたり。焼きたる後取り出されたるを見るに、驚くべし。試験は全く失敗に歸しぬ。彼は失望したり。然れども彼は挫折せざりき。彼は直ちに新に始めんと決心したるなりき。

土地測量師の職に多忙にして、彼は暫時陶器製造の試験を抛たざるを得ざりき。州の布告に従ひて、サント附近の鹹水澤を測量するべかりき。是れ地租を徴收せん爲めなりき。パーレセは此測量をなして、地圖を製せんために用ひられたり。當分の間、彼は此事に従ひ、充分の報酬を得しこと疑ひなし。され、此仕事を終へしや否や、直ちに倍舊の熱心を以て、効薬を發明せんとして、其舊き研究に従ひぬ。彼は先づ新に三ダースの土製の壺を求めて打ち碎き種々の薬を混合して之にかけ、之を近隣の玻璃を焼く竈に持ち行き、て焼きたりき。其結果は彼にやゝ希望の微光を與へたり。此竈の火甚だ高かりしかば、薬品の中熔解したるもありき。されどパーレセが熱心に探せしも、白き効薬は少しもあらざりき。

尙ほ二ヶ年の間、彼は試験を續けたり。されど思はしき結果もなかりき。かくて其鹹水澤の測量にて得し金も、今は殆ど餘す所なく、再び赤貧の生活に還れり。然れども彼は最後の大努力をなさんと決心し、先づ前よりも多くの壺を破壊したり。壺の碎片三百個以上は、薬品をかけられて玻璃焼竈に送ら

れぬ、而して彼自ら其處に出張して、燒き附けの結果を見んとしぬ。四時間過ぎぬ、此間彼は竈の傍に監視せり、かくて後竈は開かれぬ。三百個の壺の碎片中、只一個のみの上にかけたる藥品熔解したり、これを取り出して冷却せしめたるに、固まるに従ひて白色になり、光澤を生じたり。壺の一片は、白き渤藥を以て蔽はれぬ。パーレセは之を形容して、著しく美なりと言へり。長く待ちし後のことなれば、げに彼には美しく見えしならん。之を妻に示さんとて、彼は家に馳せ歸りぬ。此時彼は自ら別人の如く感じたりと言ひ居れり。さりながら成功の榮冠は、未だ得られざりき。——之を得んには前途尙ほ遠なり。最後の企畫が半ば成功せしことは、偶々彼を誘ひて尙ほ試験と失敗とを續けしめたりき。

近く来るならんと信ぜし其發明を完成せんが爲め、彼は住居の近所に一玻璃燒竈を造らんと決しぬ。此處には試験を秘密に爲すを得べし。煉瓦製造所より煉瓦を背負ひ來りて、自らの手を用ひて竈を造り始めたり。彼は煉瓦工となりぬ。労働者となりぬ。總てとなりぬ。尙ほ七八ヶ月は経過しぬ。かくて

遂に竈は出來上りて、何時にても使用するを得るに至れり。同時に彼は多數の土器を造りて、渤藥を塗るに用意せり。先づ最初土器を素燒きして、渤藥を塗り、再び竈中に投じたり。是れ最後の試験にして、成敗の決此一舉にあるなり。其財は殆ど蕩盡したりと雖も、パーレセは最後の努力を以て多量の薪を集め置き、これにて充分なりと思ひたり。遂に火は燃え立ち、燒き附けは始まりぬ。薪を加へつゝ、彼は終日竈の傍に坐しき。監視しつゝ、薪を加へつゝ、彼は終夜其處に坐しき。されども渤藥は熔解せざりき。夜は明けぬ。日は彼の労働せる處に輝きぬ。妻は粗末なる朝食を持ち來れり。彼絶えず竈中に薪を投じつゝ、續けて此處を離れざりしが故なり。第二日は過ぎぬ。されど藥は尙ほ熔けざるなり。日は西山に春きぬ。かくて夜も亦過ぎぬ。顔は青く、眼は落ち窪みて、鬚髮蓬々たるパーレセは、亂れたり。雖も而も挫折せざる心を抱いて、竈の傍に熱心渤藥の熔解を待ちたりき。第三の日と第三の夜とは過ぎたり。——第四も第五も第六すらも——然なり。六晝夜の長き間、我不屈なるパーレセは、志望を達せんと監視し、勞苦したり。而して尙ほ渤藥は熔けざりき。

時に彼ふと思へらく、坩堝の材料中に何物か足らざる所あらん。――多分
熔劑中に足らざる所あるならんとされば彼は新試験のため新しき材料を
搗き碎きて調合し始めたり。かくの如くにして更に二三週を経過したり。第
一の試験のために手自ら造りたる土器は、長き燒き附けに壞れ果て、再び
試験の用に立つべくもあらざれば、彼は更に土器を得ざるべからず。如何に
して之を求むべきか。彼の金は今や皆費されたり。されど彼は他より金を借
り得べし。彼の妻も隣人も、彼を以て愚にも無益の試験に金を浪費するもの
としたれども、彼は尙且つ善良なる品性を有したりき。彼は首尾よく金を借
ることを得たりき。薪と壺とを買ふに充分なる金を一友人より借りて、再び
試験の準備を整へたり。壺は新しき藥にて蔽はれ、竈の中に置かれ、火は再び
燃え出しぬ。

是れ最後の試験なりき。最も一生懸命の試験なりき。火は燃え立ちぬ。熱は
高まりぬ。されど坩堝は尙ほ熔けざるなり。薪材は不足を告げんとせり。如
何にして火を燃やし、續けんか。庭に柵あり、これは、燃ゆべし。試験の失敗

不屈の
堅い
竈を
燃え
せし
め、
家具
を
燃
や
し
て
成
功
す

せんより、寧ろ之を犠牲にするに如かず。庭の柵は引き抜かれて、竈の中
に投ぜられたり。柵は燃えしも無効なりき。坩堝の未だ熔解せざるを見よ。尙
ほ十分間、火燃えたらんには、或は熔解せんか。如何なる犠牲を拂ふとも、薪を
得ざるべからず。家器と架棚とは尙ほ残り、物を打ち碎く音は、屋内に起り
ぬ。今はパーレセが發狂せりと思へる。妻子の叫聲の中に、テールは抑へら
れ、碎かれて竈中に入れられぬ。而も坩堝は未だ熔けざるなり。架棚は尙ほ
残り、架棚の支柱を枉ぐる音は、復た屋内に起りぬ。柵は裂き倒され、家具の
後を逐うて、竈中に投ぜられぬ。妻と子とは家を飛び出して、狂氣の如く町を
駆けりつゝ、叫びて曰く、パーレセは憐れにも發狂して、其家具を碎きて薪と
なしつゝありと。

全一ヶ月の間、彼の褌衣は身より離れざりき。彼は勞苦と心勞と監視と食
物の不足との爲めに全く勞れ果てたりき。彼は負債の中にありて破産の淵
に瀕せり。然れども彼は遂に陶器製造の秘訣を得たりき。最後の火熱は遂に
坩堝を熔解したり。褐色なる普通の壺は、冷却せし後、之を竈より取り出すに

白色の光澤を以て蔽はれたり。之が爲めに彼は批難をも侮辱をも嘲笑をも意に介せずして、何時か都合よき日の廻り來りしならば、其發見を實際に用ひんと靜に機會を俟ち居たり。

再び赤電
となる

パーレセは、次に陶工を雇ひて己の意匠に従ひて土器を造らしめ、自らは粘土にて賞牌を造り始めたり。是れ此賞牌に泐藥を塗らんが爲めなり。然りと雖も、其陶器出來上りて賣り得るに至るまで、如何にして自分及び家族を支ふべきか。幸なるかな、サントに一小旅店の主人あり、此人パーレセの正直なるを信じて、其聰明を信ぜしにあらざらんも、彼が製造に従事する間、六ヶ月間彼を寄食せしめたり。パーレセは其雇ひし陶工に約束の給料を拂ふこと能はざる有様なりき。既に其住宅を失ひ居たる彼は、今は其身に着けたるものを、剝ぐ場合となり、陶工に其衣服二三を送りて、拂ふべき給料の一部に代へたり。

次にパーレセは改良竈を造りしが、不幸にして其内面の一部を燧石を以て追りたり。竈の熱せらるゝや、燧石は破裂し粉碎し、碎片土器の上に散亂し

て粘着せり。されば泐藥は能く熔解せしと雖も、試験は全く失敗したり。かくして六ヶ月以上の勞作は空に歸したり。人々安價を以て此出來損ひの陶器を買はんと欲せしが、パーレセは之を賣るを肯んぜざりき。彼は之を賣るを以て彼の名譽を毀損することゝなしたるなり。故に彼は全部を粉々に破碎したりき。彼は曰ひぬ、然りと雖も、希望は續きて余を鼓舞しぬ。而して余は丈夫の如く固執しぬ。時に來客あるや、心は眞に悲みしも、快濶を以て之を遇したり。余が受けざるべからざりし總ての苦痛の中、最も苦しかりしは家人の嘲弄と迫害となりき。家人等の不條理なる資財なくして、余が發明を完成するを俟ちたるなり。幾年もの間、余が竈は之を蓋ふものも保護するものもなかりき。之を監視する時は、左に猫の泣く聲、右に犬の吠ゆる聲の外は、余を助くるものも慰むるものもあらずして、幾夜も雨風に暴らされたり。時々暴風雨起りて激しく竈を打ち、此處を去りて家に逃げ込まざるを得ざりき。雨に濡れて、恰も泥中に曳かれし如き有様にて、夜半又は黎明に臥床に横はらんとて家に入るに、燈火なくして物に躓き、醉人の如く左右によろめき

き、されど實際監視の爲めに勞れ果て、又長き勞苦をなせしも、其無益なりしことを思つて、心は悲みに亂れ果てぬ、されど嗚呼、悲しからずや！我家は隠れ家ならざりき。雨に濡れ、汚れたるにも拘はらず、余は室内にて第二の迫害に遭ひたりき。こは第一の雨風の迫害よりも苦しくして、余が當時涙のため、に全く力の盡き、ざりしは、今も不思議と思ふ程なり」と。

此頃やバーレセは憂鬱となりて、殆ど一の希望なく、今にも絶え果てんばかりなりき。彼一日、鬱々としてサント附近の野にさまよひぬ。其衣は破れて垂れ下り、其身は瘠せて骸骨の如かりき。彼其文に奇なる一事を記して曰く、『當時我脚は瘠せ細りて、肉は少しも無きが如く、靴下を穿つには必ず靴下止を要したり。そは脚が瘠せ細り居たれば、靴下止なくして歩まば、直ちに靴下が下にずり下る故なり』と。彼を無分別なりとして、家族は其誹謗を續け、彼を頑愚なりとして、隣人は其嘲笑を止めざりき。故に彼は一時従前の職業に還り、一家の生計を給し、稍々隣人に信用を回復して、約一年間勤勞の生涯を送りたり。然る後復た其勇敢なる企畫——陶器製造——をなしぬ。勃藥の發明

のため、既に十年間を費したるに、彼其發明を完成するには、尙ほ約八ヶ年の勤勉研鑽を要したりき。彼は經驗に依りて次第に熟練と良結果を得たり。是れ幾多失敗を重ねて實際的智識を得しに由れり。失敗の度毎に、勃藥の性質について新に知る所あり。粘土の性質について新に知る所あり。粘土の鍛練に於て、竈の建造及び使用に於て新に知る所あり。失敗は彼に善き教訓を與ふるものなりき。

前後約十六ヶ年の勤勞の後、遂にバーレセは自ら信ずるを得るに至りて、陶工の職をなすに至りぬ。此十六年間は、彼が陶器製造術の徒弟期たりしなり。此間彼は師なくして、只獨りにて徹頭徹尾總て自ら學ぶべかりき。彼今は其造れる陶器を賣りて、家族を安樂に養ふことを得るなり。されど彼は其成就せし所を以て満足することなかりき。常に出來得るだけ完全の域に進ましめんことを目的として、改良に次ぐに改良を以てしたり。彼は陶器の模様の爲めに天然物の研究をなしぬ。其天然物研究の上達の著しきや、夫の大博物學者ビュッフォンは、彼を評して、『彼は只自然のみ産し得べき大博物學者

彼死刑に
宣告せら
るれ又宥さ

なり』と言ひし程なり。彼の自ら繪を描ける陶器は、今や美術愛玩者の寶物室に於て、珍奇なる寶物として貴重せられ居り、其價の高きこと殆ど信じ難き程なり。其陶器の繪は、多くはサント郊外の野獸、蜥蜴類、及び植物を精確に模寫し、之を巧みに集めて、皿や瓶の意匠としたるなり。

然るに、バーレセは此上尙ほ艱難に遭遇したりき。彼の艱難の最後として、吾人は之について聊か記す所あらん。彼は新教徒なりしが、時に佛蘭西南部にては、宗教上の迫害熾なりき。然るに彼は毫も怖るゝ所なくして、其信念を發表せしかば、危険なる異端者と見られたり。彼の敵は、彼を告發し、サントの彼の家は警吏の侵入する所となり、其工場は公然亂民に闖入せられ、陶器は破壊せられたり。而してかゝる騒動の間に、夜中彼はボルドーの獄に引かれ、囹圄の中に焚刑柱にかけらるゝか、又は斷頭臺に上さるゝかと待ち居たり。彼は焚刑に處せらるゝことに定まりしが、當時の有力なる貴族モン・モレンシーの元帥、之に干渉して彼の命を助けんとせり。そは元帥がバーレセの信仰を特に尊重する所ありしにはあらずして、當時巴里より約十二哩を隔

てしエクトーニに建築中なりし其壯大なる建物の敷石に勸諭を附する工人、彼の外になかりしに依れり。彼の盡力によりて一布令出でぬ、曰くバーレセを國王及び元帥の發明家に任ずと爲めに彼は直ちにボルドーの獄舎より出づるを得たり。彼放免せられてサントなる我家に還りしが、家は既に刼掠し、破壊せられ居たり。其工場は毀たれて、日光に曝され、其事業は全く破滅に歸し居たり。足の座を拂ひて彼はサントを去り、再び歸り來らじと決心して巴里に移りぬ。此處にて元帥及び皇太后より命ぜられたる仕事に従事したり。

彼の著作

彼其子息二人の助を藉りて、陶器の製造に従事せる外に、其晩年には陶器製造の術に關する著書數部をなせり。是れ國人に教ふる所あらんとせしに出で、又彼等が己のなせし如き夥多の過失をなすことなからしめんとてなり。尙ほ彼は農業、築城術、博物學に關する著述をなせしが、殊に博物學については、人を限りて講義を開きたることありき。彼星占術、人造金術、及び其他妖術を攻撃すること盛なりき。爲めに多數の敵起りて、異教徒なりとて彼を告

難びの於金
次の悪ける術
困及彼に

グゴルマリフヨ
ツル伯リッヒ
クドのゲヒン

すルハスチ
にて死

發し、彼は再び其信仰の爲めに拘引せられて、バスチルの獄に投ぜられた。彼、今や七十八歳の老齡に達して墳墓の淵に彷徨するもの、而も其精神や烈々として前日に異なるなし脅迫は彼に臨みて曰く、前言を取り消さずば只死あるのみと然れども彼が其信仰を守ることの剛健なる前に、勅令發明に於て然りしが如し、國王ヘンリー三世自ら牢舎に赴きて彼に會ひ、其信仰を取り消すことを薦めたる程なり、王は曰ひぬ、我善き人よ、汝は我と我母に務むること既に四十五ヶ年に及びたり、汝が兵火と殺戮との中にありて、其信仰に固執することは、我等は今日まで我慢し居たり、余、今人民に逼られて已むを得ず、汝を汝の敵人の手に渡さざるを得ざるに至る、汝若し改宗せずんば、明日は焚殺せらるべし」と、陛下よと不屈なる此老人は應へぬ、臣は既に神の榮光のために我生命を抛たんと覺悟し居れり、陛下は臣を氣の毒に思ふ旨を幾度も言ひ給へり、されど、臣は今陛下を氣の毒に思ふものなり、陛下は今逼られて已むを得ず」と曰ひ給ひしに、あらずや、王者にして此言ある、寔に似合はしからず、陛下も、又陛下に逼る人民も、決して余には逼ること能は

ざるなり、余は如何にして死すべきかを知らばなり」と、焚刑柱には懸けられざりしも、殉教者彼パーレセは、勿幾許もなくして死したりき、彼は約一年の禁錮を受けし後、バスチルの獄舎に於て死したりき、勇敢なる勤勞非凡なる堅忍正義を固持して一步も枉ぐるなく、幾多高德を表はすこと世にも稀なりし生涯は、茲に平和の中に其終焉を告げたりき。

堅質磁器の發明家ヨハン・フリードリッヒ・ベートゲルの生涯は、特異にして且小説的の興味ある點を多く有すれども、パーレセの生涯に比して誠に著き對照をなすものなり、ベートゲルは、一千六百八十五年ヴォオヒトラントのシュライツに生れ、十二歳にして伯林の製藥舖に徒弟となれり、彼は早く既に化學に興味を有せしが如く、其餘暇は多く實驗に用ひたり、此實驗は、重もに一事に注がれぬ、即ち普通の金屬を黃金に化せんと、試みしなり、數年を経て、彼は人造金製造者の用ふる溶解藥を發見せりと詐唱し、之に依りて人造金を造りたりと公言せり、彼は主人ツェルンの面前にて之が實驗をなし、詐術を用ひて首尾よく之を欺きしかば、主人及び他四五の見物人は、彼が眞

に銅を變じて金となしたりと信じたりき。

製藥舗の小僧が、大秘密を發見したりとの報知は、遠近に廣まりぬ。群集は此不思議なる、若き「ゴールドクック」(黄金割烹人)と直譯し得べし、黄金製造人の意を見んとて、店の周圍に集まりぬ。國王フリードリッヒ一世さへ、彼に面晤したき由を申出づるに至り、其銅より變造したりと稱する黄金を獻ずるに及び、王いたく之を徳とし、當時普魯西は財政甚だ困難なりしかば、ベートゲルを保護し、之を用ひてスバンダウの堅城中に黄金を造らしめんとせり。然れどもベートゲルは王の志を疑ひ、又恐らくは露見を恐れしならんか直ちに、出奔と心を定め、首尾よく國境を越えてサキソニーに入りたり。

サキソニーに逃る

ベートゲルを捕へし者には、一千ターレルの賞金を與へんと告示せしも、其効なかりき。彼はウキッテンベルヒに達し、強勇と綽名せらるゝサキソニーの選定侯(即ち波蘭の王)フリードリッヒ・アウグスツス一世に保護を願ひ出でたり。フリードリッヒは、當時財貨の缺乏に苦むこと大なりしが、此年少製金家の助にて黄金を、如何程にても製造し得べしと思ひて、喜悅すること

一通りならざりき。是に依りてベートゲルは、一近衛護衛兵に伴はれて密にドレスデンに送られたり。彼ウキッテンベルヒを去るや否や、普魯西より來れる一大隊の歩兵、城門に現はれて製金家の引き渡しを要求したり。されどこは既に遅かりき。ベートゲルは既にドレスデンに到着し居りしなり。此處にて彼は「黄金宮」に滞留し、甚だ懇切に待遇せられしが、嚴格に監視し保護せられたり。

ドレスデンに於ける彼の滞留

さりながら、フリードリッヒ・アウグスツスは、當時波蘭が恰も無政府の状態の下にありしを以て、直ちに去りて波蘭に赴かざるべからず、爲めに猶ほ當分の間、彼をドレスデンに残すの已むを得ざるに會せり。然れども王は黄金を得たき念を怵へ切れずして、ワルソー(波蘭の首府)よりベートゲルに書を贈りて、製造術の秘訣を傳へんことを迫れり。是れ彼を俟たずして自ら黄金を造らんと志せしに因れり。かく迫られて此若き「ゴールドクック」は、淡赤色の液體を入れたる一壺を王に送り、確言して曰く、これは凡て溶解したる金屬を黄金に變ずる藥なりと。藥ワルソーに到着せしかば、直ちに試験をな

すことに定まれり。王は太子と共に宮殿の秘密室に入りて戸を鎖し、革の前掛を着け、實の「ゴールド・クック」の如くに坩堝に銅を溶解し、彼の淡赤色の液體を之に注ぎたり。然るに結果は甚だ不良なりき。爲し得べきだけの手段を盡くせしにも拘はらず、銅は依然として銅のまゝなりき。依つてベートゲルに書を飛ばして教を求めたるに、これに成功するには、大に純潔なる心を以て製造に當らざるべからずとの答を得たり。王は其夕を惡しき交際に費したるを思ひ出して、其失敗を以て全く自己の非行に歸せり。然るに第二の試験も亦成功を齎らざりき。今は王もいたく怒りぬ。彼は實に此第二回の試験を始むる前に、罪を懺悔して赦免を得たるものなるを。

是に於てフリードリッヒ・アウグスツスは、ベートゲルに迫りて製金術の眞秘訣を打ち明けしめんとせり。是れ彼が是を以て其急迫せる財政の困難より逃るゝ唯一の道と思ひたればなり。ベートゲルは王の決心を聞きて再び逃亡せんと決しぬ。彼首尾よく監視を逃れて三日間の旅行の後、奥地利のエンスに到着し、こゝにて安全なりと思ひ居たり。然るに選帝侯の追手は、彼

を追求し來りて、其宿所を確め、此處を圍みて擣中に彼を捕へたり。彼之を拒み、又奥地利の有司に保護を願ひしにも拘はらず、追手は強ひて彼を提げてドレスデンに歸りたり。是より彼は以前よりも嚴重に監視せられしが、暫時にしてクエーニッヒスタインの堅城に移されたり。國庫は空虚なるに波蘭十個の聯隊は支拂の金に滞りて王より黄金の來るを待ち居る旨彼に傳へられぬ。國王は親ら彼を訪ひて嚴格なる句調にて直ちに黄金の製造に従事せざれば絞罪に處すべき旨を申渡しぬ。王の言に曰く「余に汝の責務を爲せ、ベートゲルよ、然らずば余汝を絞殺せしむべし」と。

後數年は経過しぬ。而してベートゲルは未だ一片の黄金をも造らざるなり。されど彼は未だ絞殺せられざるなり。銅を黄金に化するよりも、尙ほ重要な發明、即ち粘土を磁器に化することは、彼に残されたる所なり。磁器の見本は、極めて稀に葡萄牙人が支那より持ち來りしが、其價同量の黄金よりも高かりき。ベートゲル、最初ワルテル・フォン・テルハウスの薦めに依りて、此事に注意を向くるに至りたり。チルハウスは、眼に關する諸器械の製作者にし

赤色白色
の磁器を
造ること
を發明す

て、又人造金製造家なりき。彼は教育あり、且名高き人にして、フルステンブルヒ公及び選帝侯の大に尊重する所なりき。彼は尙ほ斷頭臺の死を氣遣ひ居たるペートゲルに向ひて、明かに曰ひけらく、『御身黄金を造る能はずば、他に何事をか試み爲せ、磁器を造りては如何』と。

ペートゲルは、此暗示に従ひて、其試験を始め、晝夜働きたりき。彼非常なる勤勉を以て、多年の間、其研究を續けたりしが、成功せざりき。一日埵塙を造る爲めに赤色粘土を手に入れたりしが、これが遂に彼をして成功の道に進ましむるに至れり。此粘土を高熱に附するに、玻璃の如く固まりて、且其原形を存せり。又其表面は色合と透明の度こそ異なれ、甚だ磁器に似通ひたり。誠に彼は偶然に赤色の磁器を見出したる譯なり。依つて彼はこれが製造に従事し、磁器なりと稱して之を賣れり。

「さ、は、れ、ペートゲルは、磁器の眞の色は白色ならざるべからざることを能く知れり。されば、其秘訣を發見せんとて、試験を續けたりかくして、數年は過ぎぬ、而も毫も成功する所なかりき。然るに偶然なる一事起りて、是に依り白

色磁器を造る術を知るに至れり。一千七百〇七年の某日、其鬘平生より重かりしにより、侍童に其故を尋ねたり。侍童答へて曰く、『是れ鬘の毛を整理する白粉の爲めなり。此白粉は當時毛髮の藥として一般に用ひたる一種の土より製せるものなり』と。ペートゲル想像に鋭敏なりしかば、直ちに思ひつく所ありき。此白き土の粉こそ年來搜索したる所の粘土ならめ。——兎も角、今や好機逸すべからず、早速其粉の眞質を確めんと。試験の結果、此毛髮白粉の重なる成分は「カオリン」より成り立つことを發見せり。之を見出すこと能はざりしが故に、多年其攻究に多大の困難を感ぜしなり。彼此試験に心を用ひ氣を勞すること多かりしが、其勞苦は遂に成功を以て報いられたるなり。

此發見は、ペートゲルの巧緻なる手腕によりて大成果を齎らすに及べり。彼の理學者が、多年搜索せる他の全屬を黄金に化する藥品を見出したりとするも、其價值此粘土の發見には及ばざりしならんか。一千七百〇七年の十月、其第一に造れる一磁器を選帝侯に獻じたるに、侯はいたく之を喜び、其目的を完成するに要する資財を王より給せんと決したり。彼のデルフトより

熟練の一工人を招きて、之と共に磁器の改良を始めて大に成功せり。今は全く造金術を罷めて磁器製造に移るに至り、其仕事場の戸に次の如き「二行詩」を刻したり。

神即ち大なる創造者、
製金家を陶工となしたり。

然れどもペー・ト・ゲルは、尙ほ王より嚴重に監視せらるゝを免れざりき。是れ彼が其秘訣を他に傳ふるか、又は王の許を逃れんことを怖れてなり。彼の爲めに造られし新しい仕事場も、竈も、晝夜軍隊の警戒する所となり、六人の將校は、ペー・ト・ゲルの確保のため責任を有せしめられたりき。

ペー・ト・ゲル、此新竈を用ひて益々試験する所ありしが、結果甚だ良好なりき。其造る所の磁器は、高價に賣れ行くを以て、官立磁器製造所を建つことに定まれり。假磁器「デルフト」と云ふ和蘭のデルフトにて造られし故然か呼ぶなり。實際は磁器にあらざれども、一見之に類するものなり。の製造は、和蘭を富ますこと大なりき。さらば真正の磁器の製造焉。然らざることあらん

製造はサ
キソニー
政府に採
用せらる

やと、是に於て一千七百十年一月二十三日の日附を以て一布令は下りぬ、マイセンのアルブレヒツブルヒに一大磁器製造場を建つことに關してなり。此勅令は拉丁、佛蘭西、和蘭の三國語に翻譯せられ、歐洲各國の宮廷に於ける王の公使に依りて配布せられたり。此勅令に於てフリードリッヒ・アウグスツスは、大要次の如く言へり。(中括弧を施したる其勅令の文のまゝ引けるなり。)

嘗て瑞典人の侵入に於て大に荒亂せられし我サキソニーの福祉を増さんため、余は國の「地中の財寶」に注意を向けたり。而して此探求の爲めに若干の有用の土を用ひたるに、彼等は首尾よく一種の赤き器を製造したり。此器は印度製の磁器に勝ること甚だ大なり。又彫刻し研磨し得べくして、印度製と全く等しき色附の器皿を造れり。且既に「白色磁器」の見本を得たるを以て、これも亦直ちに多量に製造せられんとしつゝあり。

此勅令は、尙ほ結尾に於て「外國の美術家及び手藝家が、サキソニーに來りて新製造場に事業を助けんことを望み、かゝる人々には、高給を拂ひ、且王の特別なる恩寵を與ふる旨を記せり。此勅令は、當時ペー・ト・ゲルが發明の實狀を最も善く示すものなり。

取録とルベ
扱として歐人
はるて奴人ゲ

支那及び日本の磁器は、凡て以前は印度磁器として知られたり。——想ふに是れ
ヴァスコ・ダ・ガマの喜望峯發見の後、葡萄牙人が印度より初めて之を持参せしが故な
らん。

獨逸國の公示に記して曰く、ペートゲルは、選帝侯とサキソニー國とな
せし功績甚だ大なるを以て、官立磁器製造所の長に任ぜられ、更に男爵に叙
せられたりと、疑ひもなく彼は是等の名譽を得るに値せり。さうながら、彼は
決してかゝる優遇を受けしことなく、寧ろ野鄙、殘酷、薄情なる待遇を受けし
なり。マッチュー及びネーミッツなる二人の廷臣、工場長の長としてペートゲ
ルの上にあり、彼は唯陶工の監督者たる地位を占めしに過ぎず、且尙ほ王の
捕虜若くは囚人とされ居たり。マイセンにて工場を建築せし時も、尙ほ彼の
助力を要せしを以て、軍隊之を護衛して、ドレスデンより此地に送り、工事終
りし後も、毎夜一室に幽閉せられたり。ペートゲル、心之がために惱み屢々王
に書を贈りて寛大の處置を請ひたり。是等書簡の中には、甚だ人を動かすも
のあり。臣は磁器製造の技術の爲めに我全心を委ね申すべし、臣は今日まで

の發明家が爲せしより以上を爲さん只臣に自由を與へよ、たと自由を是れ
其中の一なり。

是等の哀訴を、王は馬耳東風と聽き流したり。彼は何時にても金を費し恩
恵を與へんとはなし居りしも、自由に至りては其與ふるを欲せざる所なり
き。彼はペートゲルを目するに其奴隸を以てしぬ。かゝる境遇の下にペート
ゲルは王の迫害を被りつゝ、暫時の間、勤勞を續けたり。而して一二年を経て、
彼は閑却せらるゝこととなりぬ。世を厭ひ己を厭ひて、彼は飲酒に耽りぬ。ペ
ートゲルが此惡習に耽ること、人の知る所となるや、マイセン工場に於ける
勞働者の大多數は、亦等しく飲酒家となりぬ。上の好む所下之より甚しきは
なし、惡しき模範を示すとき、其威化力の如何に大なるかな。此惡風の結果は、
喧嘩となり争鬭となりて止まることなく、遂に屢々軍隊を呼びて之に干涉
し、以てボルツェラネルン是れ彼等の字なりき。の中に平和を保たんとせり。
少時にして彼等總ては其數三百人以上アルブレヒツブルヒに幽閉せられ
て、國家の囚人として取扱はるゝに至りたり。

其不幸なる終焉

遂に、ベイトゲルは、重き病に罹り、一刻一刻に、其死は、近よりぬ時は、一千七百十年の五月なりき。王は、かくも高貴なる奴隸を失はんかと驚き慌て、護衛の下に馬車にて散策することを許し、やゝ快方に向ひて後は、時々ドレスデンに赴くことを許したり。一千七百十四年四月、王は、一書を、ベイトゲルに贈りて、其全き自由を許したり。然れども、許可の來るや、遲きに過ぎたりき。飲みては、働き働きては、飲み、時に高き志望の光を得ることなきにあらざりしと雖も、其幽閉を強ひられし結果なる、不斷の病勢の下に、呻吟しつゝ、彼は、尙ほ數年を危く送りたりき。而して遂に、一千七百十九年三月十三日、齡三十五にして、死は、彼を見舞ひて、彼は復た、と苦痛なき自由の身となりぬ。彼は、マイセンのヨハンヌス寺に、——恰も犬の如く——夜半に埋葬せられたりき。嗚呼、斯の如きは、誠にサキソニの最大忍人に對する待遇なりき。嗚呼、斯の如きは、誠にサキソニの最大忍人の不遇なる最期なりき。

セーザルの磁器製造

磁器製造は、速に國庫歲入の重要な財源となりぬ。其サキソニ、選帝侯を利すること甚だ大なりしかは、忽ち歐洲の各國多くは、此例に倣ふに至り

英國の陶工ジョシア・ウェッヂウッド
エッヂウッド

英國の土器製造の昔の模

ぬ。軟き磁器は、ベイトゲルの發明に先つこと十四年に、サントクラウダにて造られしが、硬き磁器、ベイトゲル發明のの優質なることは、忽ち一般の認むる所となりぬ。其製造は、一千七百七十年、セーザルに於て始まりぬ。爾來軟き磁器は、殆ど廢せられて、硬き磁器之に代るに至りたり。こは、今、佛蘭西、工藝の最も繁盛なる一部となり、其製作品の優質なること、確實にして、争ふべからず。

英國の陶工ジョシア・ウェッヂウッドの生涯は、バーレセ及びベイトゲルに比すれば、單調にして、繁榮なりき。彼の運命や、前の二人に勝りて幸福なりと謂ふべし。前世紀(十八世紀)の中葉までは、工藝美術の點に於ては、英國は他の歐洲一等國よりも劣り居たりき。スタッフォード州には、陶工甚だ多かりし、(ウェッヂウッドも亦同州多數陶工の一人なりき。其製作する所は、最も粗惡なりき。其大部分は、普通褐色の土器にして、粘土の濕れる中に模様を附くるものなりき。上等の土器は、重ものに和蘭のデルフトより、磁器の酒盃は、重ものにコローネより供給せられたり。二人の外國陶工、即ちエレル兄弟は、

ニューレムベルヒより來りて、暫時スタッフォルド州に留まり、改良製造法を傳へたりしが、後少時にして二人はチエルシーに移りて、此處に専ら模様を施せる器の製造に従事したり。硬き尖端を以て搔くも傷つくことなき磁器は、當時未だ英國にて造られざりき。而してスタッフォルド州にて造れる其所謂「白き器」は、白色ならずして汚き乳酪色なりき。右は數言以て一千七百三十年バーズレムにて生れたるウエッヂウッドの頃の陶器製造の狀態を描きしものなり。後六十四年を経て、彼が世を去りし頃は、そは全く變化し、其精力と熟練と天才とを以て、ウエッヂウッドは、新奇堅實なる基礎の上に、此等を据えたり。而して其碑文に記せる如く「粗惡、輕細の製造を變じて、壯麗なる技術となし、重要な國家的事業となしぬ。」

世に社會の下層より起り、其精力強き性格に依りて、勞働者を實際的に訓練して、勤勉の習慣を造らしめ、又自ら勤勉堅忍の實例を彼等に示して、廣く種々の方面に於て一般の活動を勵まし、且國民的品性の建設に大に貢獻する所ある人あり。古より今に至る續て出して絶えず。而して我ジョシユア、

ウエッヂウッドも、亦寔にかゝる種類の人なり。彼はアークライトと等しき十三人の兄弟ありて、其最後なり。彼の祖父も、其父の叔父も、共に陶工なりき。其父も亦陶工なりしが、ウエッヂウッド小兒の時、世を去りて僅に二十磅の金を彼に遺したり。是より先、彼は村の學校にて讀み書きを學びたりしが、父死して後は、其兄の營める小陶器製造工場に於て、輪を廻す人として仕事に従ひたり。此處にて、彼は其生涯を開始し、其勞働の生涯を開始し、時に彼年僅に十一歳自ら曰く「梯子の最低の階段より出立した」と。間もなくして彼は兎獺なる天然痘に襲はれ、其結果は一生彼を悩ましめたり。そは此病に併發して右の膝に一疾患を得、時々苦痛起りて爲めに大に悩みたるなり。後數年、彼は右脚を切断して辛く此痛苦を脱せしと云ふ。グラッドストーン氏は、先頃バーズレムに於てウエッヂウッドの葬式演説に雄辯を揮ひしが、其中にウエッヂウッドの受けたる痛苦は、將來の卓絶を引き起したるが如しと曰へり。寔に適言と謂ふべし。即ち曰く「四肢を完全に有して之を用ふることを正しく知り居る活潑剛健なる英國工人たらんことは、彼の病之を妨げ

たりき、されど、此病は、彼をして、現狀に、満足せしめずして、何か他のもの、何か偉大なるものにならんと志さしめたり。此病は、彼の心を内面に向はしめ、彼を驅りて彼の技術の法則や秘訣に、考慮を向けしめたり。其結果、彼は是等法則秘訣を認識し、會得するに至りたり。是等の法則秘訣たるや、夫の古の美術國雅典の陶工と雖も、知らざる所羨む所なるべけんなり」と。

一千八百六十三年十月廿六日、下院議員ウヰリアム・エヴァート・クラッド・スドーン氏が、パースレムにて爲したる演説「ウヰツゲウツド」と題す。

ジョシユア、兄の徒弟たることを了へて、他の一工人と組合を結び、小刀の柄箱其他種々の家具を製造する小事業を營みたり。次に又一組合を結びて、食卓皿、燭臺、煙草入及び之に類する器物を造りたり。されど一千七百五十九年パースレムにて獨力事業を始むるまでは、其進歩寧ろ渺々しからざりき。パースレムにて彼は新しき器械を用ひ、大に事業を擴張し、熱心其職に勉めたり。彼の重ものに志したる所は當時スタッフォード州にて造られたるものよりは、形に於ても、色に於ても、光澤に於ても、耐久性に於ても、優れたる乳

酪色の磁器を製造せんとすることとなりき。彼此事を充分に了解せんが爲め其餘暇を化學の研究に用ひたり。又溶劑、渤藥各種の粘土等に關して、種々の試験をなしたり。熱心なる研究者、正確なる觀察者なる彼は、遂に、不純、硅酸を、含める一粘土を、發見したり。此土は、煨焼の前には、黒色なれど、竈の火にて熱するときは、白色となるなり。此事實を認めて考慮をめぐらし、に、陶器の赤き粉末に不純硅酸を交へんとの思ひ付きをなすに至り。又此混合物を焼くときは、白色になることを發見するに至れり。彼今や陶器術の最も重要な産物を造らん爲めには、只此材料に透明なる渤藥を玻璃狀に蔽へば宜きことゝなれり。重要な産物とは、英國陶器の名を以て、最大なる貿易價值を得、最も廣き利益となりたるものなり。

彼の成功
ウヰツゲウツドは、當分の間其竈にて苦みたりき。——パースレの如く甚しからざりしと雖も、而して彼は、パースレと同じ仕方にて其困難を打ち破りたり。即ち屢々試験を繰返し、不屈なる堅忍を持せしに依りてなり。食卓用の磁器を造らんとする第一の企畫は、不幸にも失敗又失敗に終りぬ。——數ヶ

月の勤勞が一日にして水泡に歸すること腰々ありき。彼が遂に恰好の勦藥を得るに至りしは、長き間試験を續けし後なりき。此試験の間、時間を失ひ、金錢を失ひ、勞力を失ひしこと少々ならず。されど彼は失敗に終ることに満足せずして、遂に忍耐に依りて成功を得るに至りたり。陶器の改良は彼の熱望となり、一瞬時と雖も離れしことなし。其遂に困難を打ち破り、内國用の爲め、外國用の爲め、白色磁器及び乳酪色磁器を多量に製造して、光榮ある身となりし後も、其製造を完全にしつゝ進みたりき。而して遂に彼の例に倣ふものある處に出て、全郡の活動盛になり、此大なる英國工藝の一技は、遂に確乎たる基礎の上に建設せらるゝに及びたり。『そは如何なるものにもあれ、何かの物品を製作することに力を用ひん、之を低落せしむるよりは勝れること幾許ぞ』との決心を表はしつゝ、彼は徹頭徹尾最高卓絶を目指したりき。

ウェッデウッドは、位置あり勢力ある多數の人に懇切に幫助せられたり、蓋し至誠の精神を以て働くが故に、忽ち他の真正なる勞作者の幫助と獎勵とを得るなり。彼は皇后シャーロットの爲めに食卓用の器皿を造りしが、是

れ英國に於て宮廷の食器を造りし始なり。是れ後に「女皇の磁器」と呼ばれたるものなり。かくて彼は王室陶工に任ぜられしが、こは彼が男爵に叙せらるゝよりも榮譽とせし所の官職なりき。種々の磁器を提出して、彼の模倣を求めしが、彼は巧に之に成功して賞讃を博したり。サー・ウィリアム・ハミルトンは、ハーキユレ・ニュームより古代技術の標本なる器具の類を貸したるに、彼は其正確優美なる模倣品を造りたり。ポートランドの侯爵夫人は、其バーネルニ一の壺を賣品に出せし時、彼に高價を申出でたり。彼は一千七百ギニアを出さんと申込みしも、夫人は一千八百ギニアならでは賣らず、とて之を保てり。されど彼女はウェッデウッドの目的、之を模造するにあることを知りし時、直ちに深切にも此壺を貸し與へたり。彼約二千五百磅を費して此模倣品五十個を製出したり。然るに之を賣りても、其費を償ふこと能はざりき。さりながら、彼の目的は達せられたるなり。蓋し彼の目的は、今日まで造られたるものは、英人の熟練と精力とを以てしても、必ず完成し得べし、このことを示さんとするにありしなり。

ウェッヂウッドは、化學者の埒堀らぼと古物學者の知識と技術家の熟練とを其助けとなしたりき。彼は青年の時、フラックスマン（英の彫刻家なり、一千七百五十五年に生れ、一千八百二十五年に死す）を友に得たりしが、自由に其天才を養ひ居るとき、其陶器及び磁器の爲めに多數の優美なる意匠てんさうをフラックスマンより得其陶磁器の製造に依りて是等意匠を趣味卓絶のものとなし、之を用ひて以て一般社會高等技術の普及を計りたり。彼細心なる試験と研究とに依りて磁器土器等に描畫する技術を再發見することを得たり。——此技術は古のエトラスカン人の用ふる所なりしも、ピルニー以來世に失はれたるものなり。彼は科學に貢獻する所ありしに依りて名高し。熱度計いどけいの名言はるゝ毎に之を發明せしウェッヂウッドの名は今も尙ほ思ひ出さるゝなり。彼は公益の總ての方法を支持して倦まざるの人、其トレント・ア・ンド・マーセー溝渠の建設は、島の東側と西側との水運を完成せしものにして、主としてブリンドレーの工業的熟練を助けとして、彼の公共的精神を以てせし努力に依れり。此地方の道路は甚だ嶮惡なりしかば、彼は陶器製造所

を通じて、長さ十哩の轉關路を計畫開通せり。彼の名聲を得しことの盛なるや、バースレムなる彼の製造所また之に續いてエトルリアなる彼の製造所（是れ彼の基礎を建て、築造せし所へは、歐羅巴の各所より名士の訪問するもの引きも切らざりき）

ウェッヂ
ウッドは
國民の
恩人な
り

最も低き有様に見えし陶器製造は、英國の主要なる工藝の一となり、以前は内國に要するものを海外より輸入せしに反して、今や莫大の額を他國へ輸出し、英國製の品物の輸入を禁ぜんとする趣旨にて重き課税をなすにも拘はらず、盛に陶器を外國の人に供給するに至れり。かくの如きは實にウェッヂウッドが勤勞の結果なり。ウェッヂウッド、一千七百八十五年其製造業に關して國會に證言する所ありき。時に其業を創めしより僅に三十年なりき。是に依りて見るときは、彼は只無能拙惡の工人を僅に用ひしにはあらずして、實に約二萬の人は陶磁器の製造よりのみ其衣食の料を得居りしが如し。而して尙ほ此外多數の勞働者を石炭鑛坑に、海陸の輸送に用ひ、又國の各處にて種々の事に勞働者を用ひたりき。當時事業の進歩甚だ盛なりしと雖も、

而もウェッヂウッド氏は、次の如き考を有せり。『此製造業は、尙ほ只嬰兒時代にあるに過ぎず、我爲したる改良の如きは、寧ろ微小のものなり。製造家の連續せる勤勉と増進し行く知識とにより、大英國の有する自然的便利と政治的利益とによりて、此技術は尙ほ遙に以上の發達に進み得べし』と。此後屢々此重要なる工藝が進歩發達したるによりて、此説の正確なること充分なり。一千八百五十二年には、八千四百萬個の陶磁器英國より海外に輸出せられたり。此外内國にて用ひたるものも其數甚だ多し。さりながら、此製造の尊重さるゝもの、單に其分量と價值との爲めのみならず、又實に此工藝に従事する多數の人民の境遇の改善せられたることに由れり。ウェッヂウッドが、其事業を始めたる時は、スタッフォード地方は、單に半開の有様にあるに過ぎざりき。人民は貧にして開化せず、又其數も少かりき。ウェッヂウッドの製造業が、其基礎の固まりし頃は、實に此州の人口の三倍程の數に、良き給料にて職業を與へたり。又其物質的改善と共に、道德的改善も伴ひて、此地方の風教大に純化せり。

工藝の英雄

上述の如き人々は、正に以て文明世界の工藝的英雄と稱せらるべし。此等工藝の英雄が、艱難困苦の中に忍耐自立し、高尚なる目的の追求に勇氣と堅忍とを保持したることは、夫の陸海軍の軍人が、勇氣を奮ひ、生命を致すものに劣る所なしと謂ふべし。陸海軍の英雄は、此等工藝の大家が獲得したる結果を、勇ましく保護するを以て、其務めとし、誇りとするものなり。